

## 概況

東京都福生市は、東京の西北部に位置し、人口四万五千の小都市である。都心からは、中央線立川駅で青梅線に乗換え、拝島（昭島市）、牛浜、福生等々の駅で下車すればよい。その他、市内を五日市線、八高線が通っている。時間にして都心から一時間程度である。これは、都会のサラリーマンにとつて平均的通勤時間である。それ故、市の一部に団地、住宅の類が集中している。東京二三区内に比べれば、数千円から一万円は安い、アパート・マンション類の広告が目につく地域でもある。

今回、我々が主とした調査地区は、それら新しい姿の福生市とは別の古い姿が残っている所である。そもそも、福生市は武蔵野台地の多摩川添いに拓けた南北に長い市であり、古い集落はより河川近くに存在している。もともと多摩川の水位は低く、土地の隆起もあつて現在では水害の心配はないようである。歴史的には、安政六年の牛浜一帯の洪水、明治四〇年代の洪水が知られているが、日常は水不足に悩まされた地域でもある。現在、市内を貫通する玉川上水は江戸期から工事が始まつており、各家では、その分水を使い日常生活にあてていたのである。これは、現在も一部続いており、洗濯などをしてる姿も見られるのである。又、田は少ない地域であるが、水もこの分水を利用していたのである。本来は畑作地域であり、現在、残っているのは、多摩川近くの北田園と呼ばれる地区にわずかばかり存在している。（第二部第一章「農業」参照）

福生市は、旧熊川村と旧福生村より成立している。旧熊川村は、江戸期には、天領、私領入会の村であり、旧福生村も江戸の初期には、天領、私領入会であつたが、後に代官支配地となつている村である。この両村の違いは、色々な方面において表われているように、ニワバの結びつき方、あるいは膳椀倉の管理、運営方法、あるいは稲荷講などの行事にも露呈しているようである。もともと現在、知

れるのは、その断片であり、以前はもつと顕著な相違があつたのではないかと推測するだけである。

生業としては、畑作が主で、以前は養蚕もかなり行なわれていた地域でもある。（第二部第二章「養蚕」参照）本項では、他に生業あるいは副業として機業、漁業を取り上げ、諸職として、下駄、竹細工、ミキノクチ、門松、紺屋、醬油搾り等々の職人集団の生活と各々の製作工程を道具との関連の中で述べておく。福生市における人々の生活というのは、畑作をやりながらミキノクチを作り、あるいは紺屋仕事をやりながら、ニワバの一員として葬式、婚礼に参加し、必要な膳、椀を膳椀倉から借りているということである。一部、二部あるいは章、節に分けられているが、各人が部分的に関与しており、その総体が人々の生活そのものである。

以上のような古い生活の姿と、サラリーマンのベッドタウン化した街、あるいは横田基地に代表される基地の街としての姿とが同居しているのが福生市でもある。もともとサラリーマンの居住地は、昔からの人々の土地であつたし、横田基地も地元民の共有林を多く有していた土地でもあつた。（第一部第二章第一節「中福生の膳椀倉」参照）言うまでもなく新しい生活の底に古い生活が残っているわけである。本項で扱う内容が福生市内に多く現存してあるものであり、それ故にこそ現代的な問いかけを持つものである。